

## 性格に問題のある生徒の指導過程

渡辺三朗\*

4月の級替えでAが私の組に入ってきた。4月は共に落ち着かない月である。だがAの場合とくにひどかった。何を言っても返ってくる言葉は「わからない」、時には返事もなく机にうつむき立ち去ってしまうだけであった。この事例は、そのようなAに対して、一時期全く無視するという態度で接することにより、A自身の精神的離乳を図り、変容を期待した実践の記録である。

### I 研究の目的

落ちつきがなく幼稚な生徒を受けとめ、教育相談的配慮をもって生徒の変容をみつめていく。

### II 生徒の状況

#### 1 対象生徒 中学2年生 男子 A (2年生4月より9月まで)

3才のときハシカ(4~5日)による高熱とぜん息気味であったほか幼児期に変わったことはない。「いつの頃かはっきりしませんと言語障害なのでよろしく願います。甘えん坊で困ります」(5月9日 家庭訪問時母親の話)

#### 2 家庭環境

- 家族構成 父38才 母41才 兄17才 Aの4人家族。
- 父親冬期間出稼ぎに。母親農業。兄高校2年。
- 父母共に兄に絶大な期待をかけている。兄は父母にとっては優等生である。

#### 3 諸検査

- 教研式知能検査知能偏差値40(5月26日実施)
- 学習成績(表1) (表1) 学習成績(5段階)

	国	社	数	理	英	音	美	保体	技
1学年末	2	3	3	3	3	2	1	1	1
2年1学期	1	3	2	3	4	1	1	2	2

- ゲスフーテスト - 36 特に信頼人気、忍耐、親切、態度、発表力が0であり、(5月27日実施)いばる、きまりを守らない、孤独の順に数値が高い。

#### 4 学校での状況

\* 栃尾市立南中学校

- 2学期に入って特に言語障害をひどく感じない。
  - 学習態度 1学期4・5月頃は手のほどこしようもなかったが、7月9日に入ってから学習態度は目立ってよくなってきた。9月初めて挙手。周囲の生徒が笑わなくなった。
  - 友人関係、仕方なくグループに入っているようで、女子とのトラブルが絶えない。
  - 問題と思われる行動、忘れものでは級一番、返事、挙手、応答は山びこの如し、だがノートをみるとびしりと参考書をすみからすみまで書写する一面もある。服装は一切気を配る気配はないが注意すればきちんとしてくる。無関心、無感動かと思うと自己中心的独り言を言う。交遊関係では親しく語り合えるものはなく、その代償としてか女生徒を怒らせて注意されると「ハイ」と返事をするだけである。
- 粗雑な一面と神経質な面の両方を持っており、学習と生活がうまくかみ合わない。

## Ⅲ 指導の経過

### 1 1年生の頃

互いに白紙の状態で触れ合ったわけだが特別目立ってどうこう言うほどの生徒ではなかった。入学当初はどここの学校でも有り得る現象である。ただ服装の乱れと清掃時の態度がよくないので時々注意する程度であった。だが授業中指名されたときの返事と周囲の生徒の「Aに読めるわけがないねかのう。」という嘲笑とざわめきが妙に残った。しかし真赤になりながら、たどたどしく読み、助けを求める目を私に向けて来たので適当なところで区切り、Aをほめ他の生徒を叱った記憶がある。(1学期)

2学期になっても、3学期になってもあまり変化がない。ただ2学期に入ってからだろうか、休み時間や朝といい放課後といい教務室に担任の先生をよく訪ねてきた。2学期の後半から3学期にかけてその頻度は増すばかり。いつもならよい傾向だと見過ごしてしまったであろうが、教育相談などということにかかわってみてからは不思議と気になり出した。その担任は席が私の隣だったのでよくその会話を聞いていると「何時頃寝たらいいか。」とか「先生の異動はどうだ。」とか、やたらと担任の机上のものをさわったり肩にもたれて話し込んできたり、次の時間を告げるチャイムが鳴ると去って行き、また10分休みにやってくる。どうやら教科のことだけではないらしいと思った。「親しき仲にも礼儀ありだぞ。」と担任に言われても2日ときかない。まだ本校では本格的に教育相談にのり出してから日も浅かったし、担任がこれを行うということになっていた。しかしどうもおかしな言動に耐えかねて「大変です先生。」という「いやあAは小学校の頃から言語障害でみんなに相手にされず劣等感を持っており、可哀相な子なんだ。」という意味の発言があった。「はあ、はあ」とうなづき深く追求はしなかった。生徒が暇さえあれば担任を慕う、すばらしいことだと思う。だが度を越してくると何となく心配になってきた。他の生徒が1分を惜しんで語り、学び、ときには額に汗して次時を迎えるのとはあまりにも対照的である。

### 2 担任になってから

よく「生徒には担任を選ぶ権利がない、だから教師は云々……」とそろって人は言う。たしかにそのとおりだと思う。しかし教師にも級や学年まして複雑な校務分掌など選ぶ権限はない。

#### (1) 4月のA

態度等は前述の如く変化なし。だが私に対する拒否反応が行動に現われてきた。黙秘権の行使、朝会、終会ときには授業中でも無断で教室を立って歩く。注意すると逃げ出す、何か落ち着かない。意にはとめていたがこれ程とは思わなかった。相変わらず旧担任のところへせっせと来ては帰っていく。私がAの立場であつたら同様の行為に出たかも知れない。1年間習慣化していたものがすぐに変化するわけがない。私はここに精神的離乳という何かむつかしい言葉が頭をかすめて行くのをさえぎることが出来なかった。原稿用紙に2年生になっての抱負を全員に書かせ、Aのものを見てると①よく眠る、②勉強もすこしはする、③少しはいばれる、おわり。といった調子で新学期というのにどうもエンジンのかからない車に乗せられた感。清掃の時間も殆んど窓に腰をかけグランドをボーッと見ている。注意すると降りて机を一つも運んでまたぶらり。反省会の時は決って女子から「Aが」とくる。男子は相手にしていない。家庭学習カードを提出させても火曜まで何か書いてあれば上出来、長続きしないのである。

#### (2) 5月のA

目立って変化はない。自分と性が合わないのか、自分はこれでよいのか、自己反省の日が続く。そんなとき家庭訪問（5月8日）をした。Aの家は改築中であり、点在する家の一軒から母親が走って来た。「せんしゃですか、家が出るまであの親せきに世話になっているので……」「Aは言語障害でその上わがままで困ります、よろしく……」とくったくのない笑みを浮べてよくしゃべる。家庭環境調査表に書いていることと同じことを言っているから私はうなずくだけ。一般的な話をするとすぐさえぎって「兄はいいんだけど……」とくる。私がこれだけは守ってほしいといったのは次の二つ。

- ① 絶対に本人のいる前で言語障害のことを言わないこと。（自己暗示にかかるから。）
- ② 兄と比較するのは（性格・成績・活動面）やめてほしい。（劣等感を除去するために。）

このころからAよりも自分自身の内省の日々が続く。

#### (3) 6月のA

A以上に問題のある生徒のなんと多いことか。だがAのことがどうも気になる。とうとう女生徒が「もうこれ以上がまん出来ませんから先生から注意して下さい。」と教務室に押しかけてきた。5月下旬について二度目だ。「何がどうした。」「髪の毛を引っぱったり、給食の残りや紙きれを頭に乘せたり……。」「なんでみんなが注意してやらない？」「でも……。」「といったやりとりとなる。終会、清掃時の反省会等女生徒の不満が絶えない。その都度注意してもニヤニヤしながら横を向いてしまう。自分の存在価値を認めてもらいたいのか、依然として席を立って歩き、平気である。これには何か心理的背景がある。ゲンコツでも無駄だ。そこで徹底的に無視することにした。カウンセリングに相反すると叱られるかも知れないがあえて受けの態度をとり黙殺したのである。もともと私は叱るにしても教えるにしてもその場で注意、指導する主義だ。だが馬耳東風の様相は一向に変化がない。対決にも似たおそるべき忍耐くらべの日々が流れて行く。4月以来毎日のような話し合いが全てすれ違うむなしさ。（賞めたり注意したり、幼児をなだめるに似ている）“まいった”しかし時をおいて考えてみると「こうし

てやろう」「ああしてやろう」というあせりと、思い上がりが自分になかったか、本人や親に構えの心を持たせてはいなかったか、もしそうだとすればこの地域性からいって心を開かせることは不可能に近い。自主性だの対話だのいっても道は遙かに遠い。

6月30日登校途中坂道で自転車でハンドルを切りそこねて転倒、頭部を強打意識不明となってT病院へ入院との電話。すぐ教頭先生と見舞いに行く。母親の話では3日位入院しなければその後のことはわからないと医師に言われたとのこと。7月2日また二人で容態を見に出向く、ところが「今朝退院した」と看護婦さん。学校へは何の連絡なく、学校から自宅へ電話をして、容態を聞く。

#### (4) 7月のA

7月3日家庭訪問、木の香も新しい個室(二階)でベッドに横たわっていた。父は出てこず母が顔を出した。この時は私の方で話の主導権をとり、自転車のブレーキなど注意するよう、無理をしないようにとあとは室に散らばっている参考書類や将棋の話など30分位Aと母親と話して他のこと(学校での)は一切言わず帰る。7月5日登校した。校長先生、教頭先生に「御心配かけて……」と言って来なさいと教務室へつれてきて言わせる。私をチラチラ見ながら両先生の話を聞いていた。それから2・3日たっただろうか、気がついてみて自分もおやと思った。給食が終っても「ごちそうさま」をするまで席を立たない。清掃も雑布水まで捨てていくし反省会の時も、「男子はもっと一生懸命やってもらいたい」と女生徒、「Aか」「いいえAは一生懸命やりました」屋外清掃をみてもまるきり人が変わったようだし、授業態度もよく、目の輝やきが違ってきた。7月28日の授業参観に母がきた。こんどは上記の様子など正直に話し、5月の時の確認と、もう言語の事も心配ありませんからとありのままをのべておいた。私も何故かわからない。旧担任へは用のあるときしかこなくなった。だが依然としてAの行動を無視することはやめなかった。持続性のない子だという先入観から抜け切れない。

9月に入って教務室へ来て「渡辺先生ノートを取りにきました。」とはっきり云われたのにはびっくりして私の方でおろおろした。英語のノートを取りに来たのに驚いたのではない、「渡辺先生」と確かに言ったのにとまどったのである。4月以来このように呼ばれたことがなかったからである。もう一つわからないのは授業中質問に対し挙手するようになったのと、バレーなど決して上手ではないがみんなと一緒にやる姿を見かけたことである。「どうしてこうなるのですか。」と聞きにも来る。「偉いぞ!」を連発したのもこの頃から、満足げである。しかし特別扱いほしくない。他の生徒と平等に対した。忘れ物をすれば片道50分かかかる家までとりにやった。汗びっしょりになって行って来る。

## Ⅶ 考察

○この生徒は中学に入って、時を追って息を吹き返した感がある。先生方や私に対してネチネチしたところもなくなり自制心すら思い出したように復活した一例にすぎない。特定の先生にしか自分をぶつけることが出来なかったのが、自分をふり返る余裕を持ってきた。この子にとって小学校6年間は長すぎたのではないかとさえ思われた。

○4月にこの生徒の担当になってから、もうこの学級はぶちこわされるのではないかとさえ思った。私に教育相談的な心の構えがなかったら自分自身がマイッタではなからうか。何もしてやれなかったが、

ある時は何も援助の手をさしのべないことが結果において大いなる援助となり自立への道を自分で歩むのではないかと思う。山間へき地を渡り歩いて共通して言えることは家庭（父母）があまりにも学校に頼りすぎているということである。「家で何を言ってもきかないから先生の方からよーく注意して下さい。」という声の何と多いことか。勉強の方はともかく基本的なしつけに至ってまで現代の母親は自信を失っている。激流にも似た今日の風潮の中での家庭教育のむつかしきは理解できる。だからこそ母は強くあらねばならない。Aの場合もやはりその例外ではなかった。しかしこれが単なる功利的変容なのか私には確信を持って断ずることが出来ないし、一見問題なしとされている生徒に果して問題はないかはなほだ疑問である。何故なら驥は小学校入学以前に潜在化され人間形成の底流となっていると思われるからである。もっと具体的に言うと幼児教育こそこれからの世を左右するキー・ポイントではないかと言うことである。要するに家庭教育を抜きにしてやれ進学だ、エリートコースだと叫んでも一歩間違えうと危険な方向へ突進し「家の子にかぎって」となりかねない。私が広義の社会教育の必要性とはじめに言ったのも案外身近かに土台があるように思えてならなかったからである。またAのように精神的離乳の遅れや欲求不満もそれをたどっていくと、同じことが言えるのではないだろうか。全人教育というものが知、体、徳等の円満な発達を促進することを追求するものであるならば家庭、学校、社会（環境）教育はもちろん大自然をも通じ、それぞれの全性格を求道（禅定）の精神をもって生徒に当りたいものである。人間というものの一生をみるに誰でもオムツ時代から始まって老年に至る。いかなる栄華も何千年と続く筈がない。だがその栄華を築くのも人類の知恵である。しかしそれによって失われるものを何とするか、多角的考察を深めるべく努めたい。

Aに関するかぎり私は粘着的性格の保持者のように思えてならない。学校を休むでなし何ら問題を大げさにするほどのことはないと思った。ただ作文を書かせれば便所がきたない、上級生がいばる、先生方の便所はきれいだよとかに終始した意見を書く。幼い時から兄と比較され、学校へ入ってからは、言語障害（タ・サ行）だ、馬鹿だと友人達や母親・教師にまで言われ自認して来た年月があまりにも長かった。当然劣等意識が生まれ、依頼心が根強く残るのは明らかである。これが積み重なれば欲求不満となり、客観的に事象をとらえることが出来なくなるのではないか。こういう生徒には無視することや、みんなと平等にあつかうことにより、ある時期がくれば治るものと私自身が教えられた。さらに、今後を見守りたい。

## V おわりに

以前から観察を要する生徒とは思っていたが、甘やかされ、かつ比較され、またそれを自認して、自ら三重四重苦を背負って育った事が社会的不適応に陥りやすかったり、井の中の蛙の如き運命をたどるのも心理的必然性をおびていると思う。母親が自分の分身として、苦勞して育てた生命をいとおしむ心情は察する。だが、いたづらに権威的であったり、甘やかしすぎたりすることは先に述べた依頼心や、反抗的精神の持つ子にやりやすいということは明言してよいと思う。しかも、それは4・5才で決まるのではないだろうか、いやそれ以前かも知れない。叱り方のむつかしき、ほめ方のむつかしき、両親

の平常心、何一つとっても子供の将来に重大な影響を与えないものはないと思う。生涯教育、全人教育あるいは環境、社会教育等々叫ばれて久しいが、幼児期の教育こそ、その原点ではなからうか。

しかし私共は医者でもなければ、神様でもない。Aと接し、自分の無力を嘆くと共に、一日一日成長して行くAをいとおしく感ずる昨今である。ただ家庭でも、とりまく環境やグループや、私に接する態度でも明るくなってきたことは事実だ。地域をとりまく環境は実にきびしいものがある。自然のみではなくよそ者をみる目は冷めたい。教師自体がよほどの修業を積みねば教育相談といっても絵に書いた餅である。これが問題点の最大の要素であろう。これからもAのみでなく多くの問題児を抱えざるを得なくなった現代や地域の動向を直視しつつ前進したいものである。